

証拠性から見た動詞「知る」の文法化序論：

雲南チベット語・西南官話における「知らんけど」の用法*

鈴木博之

摘要 本文针对云南迪庆藏语（康巴藏语香格里拉方言群）及迪庆汉语（西南官话滇西小片）中句末出现的“不知”相关形式进行分析。考虑到日语方言中出现的“不知”的用法以及示证范畴的框架，本文认为出现在句末的“不知”相关表达是一种推测示证（inferential）功能在不同语法化阶段的表现，并指出其现象与示证的范畴化有关。由于本文作为尝试性讨论，今后研究需要从此观点更深入的描写。

キーワード 証拠性 推測 文法化 カムチベット語 西南官話滇西小片

1. はじめに

本稿では、雲南省西北部に位置する迪慶チベット族自治州香格里拉市で話されるカムチベット語及び漢語西南官話で用いられる、動詞「知る」に相当する語を用いて、動詞の本義とは異なる用法で用いられる例について記述する。記述に当たっては、「証拠性」の角度から検討することで類型的特徴を把握し、「文法化」の度合いによってある程度特徴づけられることを示す。

動詞「知る」が動詞の本義ではなく一種のモダリティを表す形態素として機能することは、複数の言語で見られる現象である。日本語の「かもしれない」や「かしら（ん）」は動詞「知る」の本義としての意味を持たず、話者の推測を表し断定を避ける機能を持つ。漢語普通話の「不知」もまた、疑問文に先行して用いられ、話者の判然としない気持ちを示す。

日本語で2022年流行した関西方言の「知らんけど¹」も、本来は動詞「知る」の本義ではなく話者の推測を表す文末標識である²。ところが、非関西方言母語話者が使う「知らんけど」やその受け取り方は、動詞「知る」の本義を表すものと考えている事例が認められ、関西方言母語話者から見ると違和感を覚えることも少なくない。これはすなわち1つの言語体系にある要素が別の言語体系に不完全に借用・導入されたからではないかと考える。以下に、本稿の議論に関わる「知らんけど」の用法を簡単に整理してみたい。

上に言及した「知らんけど」という表現は、ひとまとまりの発話が終わった後に追加的に現れるものであり、(1)に示すように、先行する発話には終助詞がついていても許容される。なお、「知らんけど」と先行する発話の間にはポーズが入り、先行する発話とひとかたまりで発音しない。このため、以下の例では「知らんけど」の前に読点を配す

* 本稿にかかる現地調査は、2017-2020年度日本学術振興会科学研究費補助金若手研究（A）「チベット文化圏東部の未記述言語の解明と地理言語学的研究」（研究代表者：鈴木博之、課題番号17H04774）および2018-2020年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（B）「高精細度広域地図による中国および隣接する多言語地域の地理言語学的研究」（研究代表者：遠藤光暁、課題番号18H00670）の援助による。

¹ 「現代用語の基礎知識」選 ユーキャン新語・流行語大賞 第39回 トップテンに選出されている。

² これは筆者の内省に基づく解釈である。その詳細は以下の記述で示す。

る。

- (1) a. あの先生や、知らんけど。
 b. あの先生やな、知らんけど。
 c. あの先生やて、知らんけど。

(1) の用例の中で、(1c) の事例は「知らんけど」が動詞「知る」の本義と理解される可能性が十分にある。これは先行する発話が伝聞標識「て」を伴う文であることによるもので、伝聞の内容について知らないという事実を発話する意図がある場合である。このため、場合によっては「知らんけど」という表現を構成する語の原意がまだ意味解釈に影響する可能性があることを示している。

(1) に見た「知らんけど」は、「かもしれない」や「かしら(ん)」と意味上は近いが、文法的ふるまいに異なりが見られる。「名詞句+や」(標準語「名詞句+だ」)に「かも(しれない)」が後続する場合、(2) に示すように、終助詞「や」は脱落しなければ不適格になる。

- (2) a. *あの先生や、かも。
 b. あの先生かも。

以上の用例を踏まえ、「知らんけど」を標準日本語で文法構造を変えなく言い換えるならば、「おそらく」や「たぶん」の語義に最も近くなる。また、(1a) の「知らんけど」を「おそらく」や「たぶん」と置換し語順に変更を加えなくても、(3b) のように、文は自然な発話と理解できる。このことはさらに、(3c) のように、文意は変わるが「きっと」や「絶対」など別の副詞と交換可能であることも意味する。加えて、(3d) のように、「知らんけど」に先行する文に終助詞があってもよい。

- (3) a. あの先生や、知らんけど。(= 1a)
 b. あの先生や、たぶん。
 c. あの先生や、絶対。
 d. あの先生やな、知らんけど。

一方で、これらの副詞は用言の直前など文中に置くことも可能である(4a, b)が、「知らんけど」は不可能である(4c)。このことは、「知らんけど」の品詞が完全な副詞とはみなせないことを示している。

- (4) a. あの人たぶん先生や。
 b. あの人絶対先生や。
 c. *あの先生や、知らんけど先生や。

また、「知らんけど」という表現は語彙的に固定されており、同表現を構成する形態素を変更すること(5b-e)は、筆者の内省に基づけば、不可能である。加えて、もし(5f)のように「知らんけど」に念押しの終助詞がついた場合や、強調の副詞がついた場合(5g)、ほぼ動詞「知る」の本義で解釈され、「先に述べたことの真偽は実のところ知らない」という解釈が優先する。

- (5) a. 知らんけど（話者の推測を表す用法）
 b. *知りませんけど（敬体；5aの意味を意図した場合不適格）
 c. *知っとらんけど（持続アスペクト；5aの意味を意図した場合不適格）
 d. *分からんけど（異なる動詞語幹；5aの意味を意図した場合不適格）
 e. *知らんけれども（異なる接続詞；5aの意味を意図した場合不適格）
 f. ??知らんけどな（終助詞を付加；5aの意味を意図した場合、曖昧さが残る）
 g. ??よう知らんけど（副詞を付加；5aの意味を意図した場合、曖昧さが残る）

(5) の状況から、どのような発話スタイルであっても「知らんけど」を用いることになる。敬体（聞き手敬語；いわゆるです・ます体）と併用される場合を(6)に示す。ただし、敬体を用いる聞き手に「知らんけど」を用いる場面は相対的に少ない。

- (6) a. あの先生です、知らんけど。
 b. *あの先生です、知りませんけど。（5aの意味を意図した場合不適格）

また、(1) や (6a) の発話は、聞き手に確認・訂正を促しているわけではない。もちろん、これらの発話に呼応して確認の応答を期待するのも会話のストラテジーとして問題なく受け入れられるが、返答がなくても会話は成立する。すなわち、話者の発話に対する不確かさが少しでも存在するという点を補足的に表し、したがって断定した発言であるとみなされるのを後出しで避けることが主たる機能であるといえる。

以上の点を考えると、「知らんけど」は形態統語論的には語彙化した文末標識 (sentence final tag) と考えられる。一方で、非関西方言母語話者が使う「知らんけど」は、文末標識として機能するというを受容しているが、その表す意味までも模倣しているかどうかは不明確で、動詞「知る」の本義として理解している場合がある。一方で、関西方言母語話者であっても、以上の意味で「知らんけど」を用いない地域（方言差異）や、受容度に関する世代差も認められる。特に老年層では受容度が下がる例もある。これらについては、筆者の内省および厳密な検証には不十分な量のアンケート調査に基づく観察と分析であり、より妥当な方法論を用いて詳細な記述言語学的分析が必要であることは指摘しておかなければならない。ただし、1つの見通しとして、動詞「知る」から文末標識へと文法化していく過程について、地域差（方言差）と年代差に差異を認めることができるといえる。

本稿の主題は、証拠性が高度に文法化かつ体系化したチベット系諸言語 (Tibetic³) とその言語と密接な接触関係にある漢語（地域方言）に見られる、動詞「知る」を用いた表現の基礎的な記述、およびそれに基づく問題提起にある。以下、2節では雲南省迪慶（デチェン）州で用いられるカムチベット語の事例について、証拠性の体系と範疇化を紹介したのち、動詞「知る」の本義でない用法を記述する。続く3節では迪慶州で用いられる漢語に現れる文末の「不知」について記述し、その用法を明らかにしつつ、カムチベット語の事例も参照してその来歴について検討する。

本稿において、依拠する言語資料および解釈の記述は、注記のない限り筆者が2004年より継続的に行ってきた現地調査、加えて2020年以降に行ったSNSを介したアンケート調査（文字でのやりとりとビデオ通話）を通じて得られたものである。各言語資料はい

³ Tibetic という用語の定義は Tournadre (2014) に従う。また、Tournadre & Suzuki (2022) も参照。

ずれも音韻表記を用いず、カムチベット語の形式は対応するチベット文語形式⁴のローマ字転写 (de Nebesky-Wojkowitz 1956 による) で示し、漢語の形式は簡体字で示す。カムチベット語の中であっても、漢語借用語についてはそのまま簡体字で示す。例文には各言語の形式と和訳を掲げ、分析が不可欠な箇所にはグロス⁵を添える。なお、本稿では「知らない」という語形式が話者の推測を表す場合において、先の記述と考察を踏まえ、一律「知らんけど」と訳す。

2. 雲南カムチベット語の事例

本節では、主に雲南省迪慶藏族自治州香格里拉市で話されるカムチベット語香格里拉方言群に属する複数の方言について記述する⁶。一部香格里拉市以外の迪慶州の事例も含む。チベット系諸言語は体系化された証拠性標示を形態統語論的特徴として備える言語群として知られている (Tournadre 2017; Suzuki et al. 2021; Tournadre & Suzuki 2022)。チベット系諸言語の証拠性の体系は、狭義の証拠性 (evidentiality; Aikhenvald 2018 参照) に加えて認識性 (epistemicity) も加わった性質を持ち、Tournadre & LaPolla (2014) で証拠性 (evidentiality) の定義を従来の「情報源 (information source)」を「情報へのアクセス (access to information)」と「情報源 (source of information)」に分けて定義することにより、チベット系諸言語の証拠性の体系を説明できるとした (Tournadre 2017)。

チベット系諸言語は言語ごとに証拠性の体系化されている範囲が異なり、個別言語の記述研究によって差異が徐々に明らかとなる⁷一方、Tournadre & LaPolla (2014) の立場を採用して記述を進めると、中国に分布する諸言語については、ある程度共通の枠組みをもっていることも分かってきた (Suzuki et al. 2021)。本稿では、この理論的枠組みを具体例とともに見て注目する部分を抜き出し、続いて個別の地域方言 (建塘方言) の事例を検討する。

2.1 カムチベット語香格里拉方言群における証拠性の枠組み

カムチベット語香格里拉方言群に属する方言で、Tournadre & LaPolla (2014) の立場から全面的な証拠性の記述が提出されているものには、Suzuki & Lozong Lhamo (2021) の吹亞頂 (Choswateng) 方言⁸と Zhou & Suzuki (2022) の安南 (Alangu) 方言がある。両者の証拠性の体系については若干の異なりが認められ、おそらく香格里拉方言群の内部で細かな差異が存在すると見込まれる。

香格里拉方言群に属する諸方言において、形態統語論的に区別される証拠性のカテゴリーは次のようである: 向自己 (egophoric)、陳述 (statemental)、視覚感知 (visual sensory)、非視覚感知 (nonvisual sensory)、推定 (inferential)。方言によって推定が知覚推定 (sensory

⁴ ただし古チベット語のつづりも含みうる。また、対応する文語形式が存在しない場合も、語源と音対応を考慮して仮の文語つづりを与える。ここでいう「チベット文語形式」はいずれをも含む。

⁵ 本稿で使用するグロスはカムチベット語と漢語に共通とし、次の通りである。1=1人称; 3=3人称; ACP=達成; CPV=判断動詞; EGP=向自己; EXV=存在動詞; INFR=推定; LGINFR=論理推定; NEG=否定; PL=複数; PROG=進行; Q=疑問標識; SFT=文末標識; SNINFR=知覚推定; STA=状態; STEM=複音節動詞の動詞語幹; STM=陳述; VSEN=視覚知覚。加えて、例文の初頭に付す記号として、次のものを用いる。*=非文法的または意図する意味を表す表現として不適格; ?=文法的であるが違和感があり、用いない; ??=指示のある意味を表す表現として適格であるかどうかを言明するのが困難である。

⁶ カムチベット語およびその下位方言群の分類およびその方法についての見解は、Suzuki (2022) および Tournadre & Suzuki (2022) による。

⁷ たとえば、Gawne (2016) のヨルモ語、Zeisler (2018) のラダック語、Zemp (2018) のプリク語など。

⁸ 本稿では簡便のため、チベット系諸言語の方言名を漢語地名で示す。

inferential) と論理推断 (logical inferential) を区別するものもある⁹。まず、吹亞頂方言の証拠性の体系について具体的に見る。判断動詞肯定形を例に、表形式で掲げる (表 1)。

表 1 吹亞頂方言の証拠性の体系：判断動詞 (Suzuki & Lozong Lhamo 2021 に基づき加筆修正)

向自己	陳述	視覚感知	非視覚感知	推定
zin yin	red a 'bo	zin snang	grag zin grag	zin log zin pa a zin 'dug a yin bzhin snang zin 'dra a snang zin a yin zon zin a 'dug zon

もし表 1 の形式を体系ととらえた場合、1つのカテゴリーに複数の異なる形式を配置するのは体系 (の区分) として不完全であるという批判もある。ただし、表 1 は証拠性のみに基づいて分類したものであり、複数の語形が異なる基準で使い分けられることを記述していないため、この批判は該当しない。加えて、1コラムに記される語形間の関係は各証拠性カテゴリーによって異なる点にも注意が必要である。向自己の形式である zin と yin はスタイルの違い (後者はフォーマルな口調に現れる) である。陳述の形式である red と a 'bo は確かさ (certainty) の度合い (後者は前者より確かさの度合いが低い) を反映する。非視覚感知の形式である grag と zin grag は派生の関係 (後者が前者に先行して存在した) にある。そして、推定の形式の多様性は確かさの度合いが区別されていると説明でき、「zin+推定を表す形態素」とまとめることができる。

本稿の興味は、1節に示したように、推定の表現の多様性にある。そのため、表 1 の諸形式について、作業仮設として語構成を分解し考察を進めていく¹⁰。

表 2 吹亞頂方言の判断動詞・推定の語形式の形態素分析

確かさの度合い	語形	作業仮設としての形態素分析
高	zin log	zin-log 'CPV-INFR'
	zin pa a	zin-pa-a 'CPV-INFR.SFT-SFT'
	zin 'dug	zin-'dug 'CPV-INFR'
	a yin bzhin snang	a-yin-bzhin-snang 'Q-CPV-PROG-STA.VSEN'
	zin 'dra a snang	zin-'dra-a-snang 'CPV-似ている-Q-STA.VSEN'
	zin a yin zon	zin-a-yin-zon 'CPV-Q-CPV-疑う'
低	zin a 'dug zon	zin-a-'dug-zon 'CPV-Q-INFR-疑う'

表 2 から、推定の証拠性を形成する諸形式には、推定の意味を含む形態素が向自己の

⁹ これらの証拠性カテゴリーを Aikhenvald (2018) の分類と対照すると、視覚感知は visual、非視覚感知は sensory、知覚推定は inferential、論理推断は assumptive にそれぞれ対応関係があるとみてよい。ここに向自己 egophoric や提題 factual (または陳述 statemental) を含めて一体的に取り扱うのが Tournadre & LaPolla (2014) および Tournadre (2017) の立場である。

¹⁰ 文法化した接辞にどのようにグロスをつけるかは、主に 2つの立場がある。歴史言語学的立場から、語源に従い各形態素ごとにグロスをつける方法と、記述言語学的立場から、1つの機能を担う形態素群にまとめて1つのグロスを与える方法である。立場の違いについては、Zeisler (2004: xxiv-xxv) も参照。双方の立場を統合した記述方法 (星 2016 など) もあるが、共時的記述としてあまり用いられてはいない。本稿のグロスでは記述言語学的立場を採用するが、「作業仮設」という視点で前者の方法を意図して用いる。表 2 は歴史言語学的立場からの記述であるが、記述言語学的には、すべての形式が等しく CPV.INFR と書かれるものである。

形式（動詞語幹）と組み合わせあって形成されるものとともに、動詞の本義として「似ている」や「疑う」がある語幹も含まれ、加えて視覚感知の形態素も含まれるものがあることが分かる。加えて、これまで収集した言語資料の中には、以上に示したもののほかに、これらの形式に *myi shes* 「知らない」という形式が後続する例が認められるが、先行研究ではこの形式を推定の証拠性の中に独立して配してこなかった。これは、吹亞頂方言の場合、*myi shes* 「知らない」は理論上すべての推定の形式に付加できる要素であるうえ、チベット系諸言語の統語論において *shes* 「知る」という動詞は文末に置かれるため、語順の上で特別な形式ではないことによる。ところが、音声実現の上で、当該の2音節は常に独立の声調を持たず軽声のように発音され、また意味の上で、*myi shes* の付加は「知らない」という意味を持たず、推定に対する確かさの度合いを若干引き下げる修辭表現であると考えられる。

- (7) a. *kho* *dge rgan* *zin log*
 3 先生 CPV.INFR
 「彼は先生に違いない」
- b. *kho* *dge rgan* *zin log-myi shes*
 3 先生 CPV.INFR-SFT.INFR
 「彼は先生に違いない、知らんけど」

ただし、吹亞頂方言では *myi shes* は推定の形式と共起するのが大半で、他の証拠性の形式の場合、使用例は少ない。特に陳述の形式 *red* または *a 'bo* と共起する例は未見である。また、推定の形式を構成する「推定を表す形態素」の位置に *myi shes* が現れることはない。すなわち、**zin myi shes* という表現は、現在のところ確認されていない。

一方で、安南方言では、吹亞頂方言の推定のカテゴリーについて形態論的に知覚推定と論理推断に分かれる。表 3 に示すように、吹亞頂方言の推定と一致または酷似する形式は論理推断の形式に現れる。

表 3 安南方言の知覚推定と論理推断：判断動詞（Zhou & Suzuki 2022: Appendix に基づき加筆修正）

知覚推定	論理推断
<i>zin min snang</i>	<i>zin 'dug</i> <i>zin a zon</i> <i>a zin zin</i>

表 3 の知覚推定の形式 *zin min snang* を表 2 のように語構成分析すれば、*zin-min-snang* ‘CPV-CPV.NEG-STA.VSEN’ となり、肯定と否定の判断動詞の連続に視覚感知の証拠性標示が組み合わせられている。カムチベット語には、 $V_1+NEG+V_1$ タイプの構文で諾否疑問文を形成することは少ないが、自問自答になる事例がある。この知覚推定の形式は、この自問自答を安南方言で独自に推定の枠組みに文法化させた可能性が指摘できる。

また、安南方言でも *myi shes* が論理推断の形式に後続する事例がある。観察例が吹亞頂方言より少ないため、使用頻度について比較することはできないが、形態統語論上可能であるということは観察されている。

以上、2種の雲南カムチベット語の事例について、推定の証拠性と共起し文末に現れる *myi shes* 「知らんけど」の概要を示した。続く 2.2 節では、先の2方言と同一方言群に属する建塘（rGyalthang）方言の *myi shes* の用法について見ていきたい。

2.2 建塘方言の記述

建塘方言は迪慶州香格里拉市の政治経済の中心地である建塘鎮で話されている変種であり、これまでもっとも多く記述研究の対象となってきた(陸紹尊 1990、《中甸县志》1997、《云南省志 卷五十九》1998、Hongladarom 2007 など¹¹⁾。一方、地域方言としての建塘方言は漢語の影響を強く受けて漢化が激しく、周辺の村々の変種と一定の異なりが見られるほか、母語として身につける人が急激に減ってきている。加えて、迪慶州の他の地域のチベット人も居住するようになり、カムチベット語の他の方言による建塘方言への影響も無視できないものと考えられる。

さて、建塘方言における証拠性標示を見ると、表 1 に示したものに近い体系を示す。ただし、推定の形式については、吹亞頂方言と同様の *zin log*, *zin pa a*, *zin 'dug*, *a yin bzhin snang*, *zin 'dra a snang*, *zin a yin zon* のほかに、*zin myi shes* という表現もあることが特筆に値する。

- (8) *kho* 老师 *zin myi shes*
 3 先生 CPV.INFR
 「彼は先生だろう、知らんけど」

(8) の文脈は、「彼」で指示される人物が (A) 学校内で子供を引率している大人であることを視認しての発言である場合 (感知推定)、(B) 師範大学を卒業して地元の高校に就職しているとすれば守衛や清掃員ではなく先生のはずと判断した発言である場合 (論理推断) のいずれの可能性もある。また、いずれの文脈でも描写対象が 3 人称であって *zin myi shes* という表現が成立するとすれば、これを *zin myi-shes* ‘CPV.EGP NEG-知る’すなわち向自己の判断動詞に後続して「知らない」という動詞が付加された形式とは分析できない。この文脈で向自己は用いられないからである。

ところが、建塘方言では、(9a) のように陳述の証拠性と共起できる。(9a) と (9b) は同一の形態素から構成される発話であるが、(9b) の *myi shes* は独立の声調を担う点で異なる。建塘方言では補文標識が義務的でないことから、(9b) のような形式が文法的となる。

- (9) a. *kho* 老师 *red-my i shes*
 3 先生 CPV.STM-SFT.INFR
 「彼は先生だ、知らんけど」
 b. *kho* 老师 *red* *myi-shes*
 3 先生 CPV.STM NEG-知る
 「彼が先生であることを (私は) 知らない」

ここで注目すべきは、(9a) において *myi shes* が独立の声調をもたない点である。記述言語学の観点から見て、この特徴は有標である。なぜなら、否定接辞は動詞句の内部に現れたときも後続の動詞語幹とともに独自の語声調のパターンを取るからである。このことから、*myi shes* が形態統語的に見て独立した動詞句ではなく、高度に文法化し接辞として成立しているものであると判断することができる。しかしながら、(9b) のように、動詞「知る」の本義を意図している可能性もあるため、さらに調査が必要である。

¹¹ 研究史については鈴木 (2018) を参照。

さて、(8) と (9a) が共存することは、次のことを示唆している。(9a) のように、*myi shes* が推定の文末標識として機能すると同時に、(8) のように、*myi shes* が推定の証拠性を構成する一部としてその体系にすでに組み込まれているということである。(8) に現れる推定の形式 *zin myi shes* を形態素分析すると、陳述の動詞語幹がその第 1 要素に来ない傾向にある¹²。このことから、(9a) の構造は (8) よりも先行して生じ、さまざまな動詞句に後続できたことが指摘できる。実際のところ、*myi shes* は判断動詞だけでなく、存在動詞 (10) や他の語彙的動詞句 (11) にも後続しうる。この点で、*myi shes* は文末標識としての機能を獲得しているものと考えられる。

(10) *kho* *phag* *'dug red-myi shes*
 3 ぶた EXV.STM-SFT.INFR
 「彼はぶたを飼っている、知らんけど」

(11) *kho* *zan* *za-thon-myi shes*
 3 ごはん 食べる-ACP-SFT.INFR
 「彼はごはんを食べ終わった、知らんけど」

もし使用に制約があるとすれば、*myi shes* は向自己の証拠性とは共起しないということがある。向自己とは、話者自身の行為・動作・状態について述べるときに用いられることが多い¹³が、向自己で標示されることに「知らんけど」を付加することは、語用論上意味をなさない発話になるといえる。

さて、日本語関西方言の「知らんけど」の現象を参照して建塘方言の文末標識としての *myi shes* を見ていくと、次のことが言える。まず、(1) のような事例と異なり、建塘方言の *myi shes* は、その直前に他の文末標識が現れない。

(12) a. *kho* 老师 *red-myi shes* (=9a)
 3 先生 CPV.STM-SFT.INFR
 「彼は先生だ、知らんけど」
 b. **kho* 老师 *red-'o-myi shes*
 3 先生 CPV.STM-SFT-SFT.INFR
 (「彼は先生だよ、知らんけど」を意図して)

建塘方言では、文末標識の共起は特定の組み合わせで可能であるが、その組み合わせに *myi shes* が入る例は観察されず、また文法的でない判断される (12b)。一方で、(3) のように、確かさの度合いを表す語 (漢語からの借用語) と *myi shes* は交換可能であり、

¹² この点については複数の見方がある。まず、陳述と感知に形態上の対立が認められない場合、あたかも陳述の形式が推定の形式の第 1 要素に来ているように見えるが、実際には感知の形式からの派生である場合が報告されている (Suzuki et al. 2021)。また、推定の証拠性の形式には向自己の動詞語幹が使用されるように見えるが、表 2 の分析で示したように、推定の証拠性の範疇に現れる向自己の形式には向自己 (EGP) をグロスに表示していない。そもそも向自己の形式は「それが単独で用いられることによって向自己の証拠性を獲得する」という歴史的側面を重視する立場と、「向自己の動詞語幹が派生形で用いられるとき向自己の機能が中立的になる」という共時的側面を重視する立場に分かれる。

¹³ 「1 人称」と言えない例として、内的感覚動詞 (endopathic; 例えば「空腹である」や「病気である」など; Tournadre 1996:226 参照) を用いた表現や、記憶を失った状態、夢の中に出てきた本人についての描写などでは、向自己の証拠性で標示されない。詳細は Tournadre & Suzuki (2022) を参照。

(13) のような発話は認められるが、漢語の影響を多大に受けた発話であり、このような発話（言葉遣い）を快く思わない話者もいる。

- (13) *kho* 老师 red-可能
 3 先生 CPV.STM-たぶん
 「彼は先生だ、たぶん」

カムチベット語に限らず、チベット系諸言語では、確かさや頻度を表す副詞は動詞の直前に現れるのが広く受け入れられる構造である。ただし、確かさについては推定の証拠性の標示に組み込む変種が多い¹⁴。一方で、確かさの多様な度合いを漢語からの借用語（「肯定」や「可能」など）で示し、かつ動詞の直前に配置する変種もある（鈴木、四郎翁姆 2018）。建塘方言の場合、(13) のように「可能」を借用しているが、出現位置は文末に限られ、動詞を修飾する副詞の占める一般的な位置である動詞語幹の直前に現れることはない。このことから、(4) に類する表現は、*myi shes* も「可能」も不適格となる。

(5) に対応する形式を建塘方言で見出すことは困難であるが、(5d) と並行するように類似の意味を持つ異なる動詞語幹 *ha go* 「分かる」を用いた例 (14) や、(5f) と並行するように文末標識 *'o* が後続する例 (15)、または否定辞が *myi* でない例¹⁵ (16) は、いずれも不適格と判断される。

- (14) **kho* 老师 red-ha *myi-go*
 3 先生 CPV.STM-分かる NEG-STEM
 「彼は先生だ、知らんけど」を意図して)

- (15) **kho* 老师 red-*myi shes-'o*
 3 先生 CPV.STM-SFT.INFR-SFT
 「彼は先生だ、知らんけど」を意図して)

- (16) a. **kho* 老师 red-*ma shes*
 3 先生 CPV.STM-SFT.INFR
 「彼は先生だ、知らんけど」を意図して)
 b. **kho* 老师 red-*gar shes*
 3 先生 CPV.STM-SFT.INFR
 「彼は先生だ、知らんけど」を意図して)

ただし、(14, 15) とともに、動詞 *ha go, shes* を文末標識ではなく動詞の本義と理解することで、それぞれ「彼は先生であることは私には分からない」、「彼は先生であることを私は知らないよ」という解釈は可能である。

ところが、(8) の例には文末標識が現れうる。

¹⁴ 特にアムドチベット語では、当該の語形が豊富にある (Suzuki et al. 2021)。一方で、確かさを証拠性に組み込む立場 (Oisel 2017) のほか、証拠性とは別建ての構造を設定する立場 (Mélac 2014) もある。

¹⁵ 雲南のカムチベット語では、3種類の否定辞がある (*myi, ma, gar*)。詳細は Suzuki & Lozong Lhamo (2021) を参照。

- (17) kho 老师 zin myi shes-'o
 3 先生 CPV.INFR-SFT
 「彼は先生だろうな、知らんけど」

(17) が示すのは、zin myi shes という形態素の連続がすでに判断動詞の 1 単位として認められ、単一の動詞句と判断されているためであろうと考えられる。したがって、(17) の文末標識は、myi shes だけにではなく zin myi shes 全体に対する確認を表すため、対応する日本語訳は「彼は先生だろうな、知らんけど」となり、「彼は先生だろう、知らんけどな」ではないと解釈する。

以上、日本語の事例を参照して建塘方言の myi shes の用法を記述した。その結果、建塘方言の myi shes は「知らんけど」と形態論的な派生関係と用法の面で一定の対応関係が認められることが分かった。また、建塘方言と近い関係にある吹亞頂方言や安南方言と比べると、myi shes が証拠性の体系の中に入り込んでいる点で、文法化の度合いが高いと判断できる。

3. 西南官話の事例

本節では、雲南省迪慶藏族自治州で話される地域共通語として機能する西南官話（雲南片滇西小片；以下「迪慶漢語」）の事例を記述する。主にチベット族による発話を対象とするが、漢族のほか、ナシ族、回族、ペー族などによる発話も観察対象に含まれる。以下に記述するデータでは、漢語の母語話者であるかどうかは問わず、また迪慶州内の出身地についても問わない¹⁶が、迪慶州で言語形成期を過ごした話者からのデータを採用する。

3.1 言語現象の記述

まず、迪慶漢語における典型的な例として、作例 (18) を示す。

- (18) a. 他 是 老师 不知
 3 CPV 先生 SFT.INFR
 「彼は先生だ、知らんけど」
 b. 他 不-是 老师 不知
 3 NEG-CPV 先生 SFT.INFR
 「彼は先生じゃない、知らんけど」

迪慶漢語の場合、文末の「不知」の前にはポーズが入らず、先行する語とひとかたまりに発音され、かつ声調は軽声に準じて低平となる。また、(18) の文自体は疑問文ではなく、平叙文である。平叙文であれば、肯定 (18a) も否定 (18b) も用いられる。迪慶漢語の諾否疑問文は、雲南の西南官話で広く認められるように、動詞に先行して [kə⁵⁵]¹⁷ を配したり、「V₁ 不 V₁」型を取ることで成立する（《云南省志 卷五十八》1989）。そして、これら諾否疑問文の形式になる場合、「不知」は共起しない。

¹⁶ 本稿で記述対象とする方言は、同じく迪慶州で話されている維西方言（呉成虎 2007）とは、音形・語形ともにある程度異なりがある。

¹⁷ 対応する字は不明であるが、迪慶漢語使用者の中では「给」と表記することが多い。本稿でも「给」を用いて表記する。Zeng (2018: 38–39) は官話の中で類似の諾否疑問を形成する地域を示しており、その中で当該字に「格」を用いている。なお、本稿で [] に入れて示す音形式は中国方言学における厳密な意味での字音ではなく、あくまでも調査時に記録した口語形式に基づく音声表記である。

- (19) a. *他给是老师不知?
 b. *他是不是老师不知?

発話環境を考慮に入れると、「不知」の使用は確認の応答を期待する場面が多いが、単に発話者の推定を述べるにとどまる場合も少なくない。したがって、(18a)に続く会話としては、「そうだ、彼は先生だ」または「違う、彼は事務員だ」というように発話への返答のほか、(18a)の内容を真ととらえて、「とりあえず彼は責任者のように見えるから、様子を尋ねてみよう」というように会話を進めることもまた自然である。

(18a)のような肯定文の場合、「不知」が動詞の直前に現れる例もあるが、それは「肯定」「可能」などの副詞と同種で、確かさの度合いにを意味する副詞的な要素であり、「たぶん」と訳出できる。この場合も、形式上は平叙文であり、疑問文とは共起しない。

- (20) 他 不知 是 老师
 3 たぶん CPV 先生
 「彼はたぶん先生だろう」

さて、(18)のタイプの「不知」は疑問詞と共起する場合が認められるが、その疑問詞は不定代名詞の用法である。(21)の発話にある「几个」は「いくらかの人」という意味であり、「不知」はそれに先行する文の内容全体について確かさの度合いが低くなる意味で「知らんけど」と対応する。このため、人数について尋ねる意図はない。

- (21) 他们 有 几个 不知
 3PL EXV いくつ SFT.INFR
 「彼らは数人いる、知らんけど」(「彼らは何人いるのか知らない」ではない)

(21)の発話を受けて、聞き手は数を特定して答えることができるが、(22)のように「不知」を含む場合と、(23)のように「说」を含む場合と、(24)のように「么¹⁸」を含む場合がある。

- (22) 有六个不知。
 「6人だ、知らんけど」
- (23) 有五个说。
 「5人だって」(伝聞)
- (24) 有五个么。
 「5人だね」(確認ずみ)

(21-24)の発話は、実際のところ、レストランであった対話である。予約に従ってテーブルを準備している状況で、3人の従業員A, B, Cが話している。(21)の話者Aは4人以上いることを把握しており、規定の6人用1テーブルで準備しようとしていた。そこに別の人Bが記憶に基づいて(22)を発話した。続いて、予約の電話を受けた人Cが

¹⁸ 迪慶州の中で維西県出身者は特に「么 me³⁵」と発音する。

(23) を発話し、予約確認表を B が確認しに行つて (24) を発話した。この一連の発話において、(22-24) で文末に来る要素について見ると、「不知」「说」「么」の中で文末標識は「么」のみと考える。「说」は迪慶漢語では伝聞を表す表現であり、その否定形「不说、不有说、没说」は現れないということを考えれば、動詞由来の文末標識と考えることが可能である¹⁹。「不知」が肯定形で現れないのと並行する関係にあると言える。

さて、以上の記述では「不知」を文末標識として取り扱ってきたが、それが文末標識であるということを以下に検証する。迪慶漢語では、「知っている」という意味を表す動詞語幹には 2 種あり、「知道」と「晓得」である。「知」というように 1 音節では決して用いられない。このため、「不知」を「不知道」としたり (25a)、「晓得」と交替すること (25b-25d) は、(18a) の意味として受容されない。加えて、迪慶漢語の否定詞には「不、不有、没、哪²⁰」などがあるが、「不知」以外の表現はない (25e-25f)。

- (25) a. *他是老师不知道。(「彼は先生だ、知らんけど」の意味で不適格)
 b. *他是老师不晓得。(同上)
 c. *他是老师晓不得。(同上)
 d. *他是老师不晓。(どんな文脈においても「不晓」は未確認)
 e. *他是老师不有知。(どんな文脈においても「不有知」は未確認)
 f. *他是老师没知。(どんな文脈においても「没知」は未確認)

(23-24) に現れる文末標識の組み合わせてみると、以下のような制限が認められた。

- (26) a. 有六个不知说。
 「6 人だ、知らんけど、って (誰かが言っていた)」
 b. *有六个不知么。
 (27) a. 有五个说不知。
 「5 人だって、知らんけど」
 b. *有五个说么。
 (28) a. 有五个么不知。
 「5 人だね、知らんけど」
 b. 有五个么说。
 「5 人だね、って」

この結果は、文末標識が 2 つ連続しても許容されるものは、本来は文末標識の間で統語論的に断絶していることを示唆している。(26a) の場合は「[[有六个不知]说]」、(27a) の場合は「[[有五个说]不知]」、(28a) の場合は「[[有五个么]不知]」というように分析できる。一方、受容されない (26b) の場合は「*[[有六个]不知么]」となつて、「不知」と「么」

¹⁹ これはカムチベット語の伝聞の証拠性が現れる位置にその標識の来歴である動詞語幹 zer「言う」を翻訳借用した可能性を考える。カムチベット語と漢語の接触については、意西微薩・阿錯 (2004) の倒話 (四川省雅江県) や Zhou & Suzuki (2022) のシリブ (水磨房) 語 (雲南省香格里拉市) などを参照。一方、言語接触ではなく漢語 (成都方言) 自体の「说」の機能語化とする分析もある (熊 2007: 75-91)。

²⁰ 「哪」は修辭疑問 (反語) に由来する形式であるが、反語よりも幅広い文脈で用いられ、否定副詞としての機能が現れている。

が連続し、それが許容されない原因という解釈である。

また、文末に現れる「不知」の第2音節は[tʂʊ⁰]という発音のほか、しばしば韻律的に有意な長さのある[tʂʊ⁰]という発音がある。後者は「知」と何らかの音節の縮約というよりは、単に「知」に対応する音に特別なイントネーションが被さったものと理解する。すなわち、長音形式であっても「知」に後続する要素を認めないということである。このように考えると、「不知」に直接続く文末標識は現段階での言語資料の中には現れないということになり、「不知」によって発話が終わっていることが示されることになる。

「不知」に後続して、聞き手に同意を求める表現[ga⁵²]²¹（嘎、噶；以下「嘎²²」）が現れる。ただし、「不知」と「嘎」の間には常にポーズがある。(29)は、話者に確かな人数を確認する意図はなく、「6人いるとして考えていいよね」ということに同意を求めているのである。

- (29) 有六个不知，嘎？
「たぶん6人いる、でしょ？」

「嘎」は文末標識として用いられることもあり、自身の発言を確認し、納得したことを示す。この場合は、「么」と同じく直前の語句とひとかたまりに発音される。ただし、この用法の「嘎」には「不知」は後続しない。

- (30) a. 有六个嘎。
「6人いるのか」
b. *有六个嘎不知。

「嘎」は直前の発言に納得していることを意味しているため、それに「不知」を付加して推測であると述べるのは意味の上で相反することになる。また、(26–28)で見たように、2つの文末標識が連続することはないが、(30b)の場合は「嘎」の直前で文が途切れると考えられ、「不知」を文末標識とするならばそれ単独で文となりえないため、これが受容されないと判断される要因であるといえる。

最後に、「不知」が確かさの度合いを示す副詞との交替と共起制限について見る。迪慶漢語では、「不知」はそのままのイントネーションを維持して確かさの度合いを示す副詞とは交替できず(31a)、その副詞の前にポーズを置くことで受容される(31b)。また、動詞の前に副詞を用いた文とは共起しにくいようであるが、表現として受容できないわけではない(31c)。

- (31) a. *有六个可能。
b. 有六个，可能。
「6人いる、たぶん」
c. ?可能有六个不知。
「たぶん6人いる、知らんけど」

²¹ 「嘎」の声母は音声実現が有声閉鎖音に極めて近く、諾否疑問を形成する「给」の声母が常に無声無気音であることとは対照的である。

²² 熊(2007:92–97)は成都方言(西南官話)について、類似の「嘎」を「该是哈」の縮約と考えている。ただし、迪慶漢語では「该是哈」という音形は観察されていない。

以上が現段階での言語資料に基づいた記述となる。日本語の事例と対照すると、「不知」と「知らんけど」は、形態論的な派生関係と用法の面でほぼ対応関係があるように見える。また、「知らんけど」では成立しないが、「不知」を副詞のように動詞に先行する位置に現れる事例も認められる。文末標識の共起関係および副詞との交替可能性について見ることで、「不知」が文末標識として機能していることが分かる。

3.2 迪慶漢語「不知」とカムチベット語 *myi shes* 及び日本語「知らんけど」との対照

3.1 で記述した「不知」の用法は、普通話の「不知」と比べて、「文における出現位置」及び「文の種類」の2点で異なる。(31)は普通話の辞書的記述の一例である。

- (32) 我有一个主意，不知行不行？
「私に1つの考えがあるが、よいかどうかしら？」(伊地智 2002:120)

(32)の用例では、普通話の「不知」は「動詞の直前に出現」し、その動詞が「疑問文」の形式を示す点が特徴的である。疑問文は「V₁不V₁」型の諾否疑問文のみの例があり、疑問詞疑問文と共起する場合は「不知」の意味も文型も異なる。この点で、3.1節で記述した「不知」と異なりが見られる。加えて、(32)の「不知」は統語論上動詞として考えられ、「肯定」や「可能」などの副詞とは交替できない点もまた異なる。

北京で使用されるという限定条件がつくけれども、倉石(1990:49)にも「不知」について記述があり、動詞の扱いの中で「・・・かshれない」という訳語も挙げられている。また、「不知道」にも並行する記述があり、「・・・かshれない」という訳語も挙げられている。倉石(1990)の記述で注目できるのは、「不知」という表現が、目安としてはあるが、「古典のなかのことばではあるが、耳で聞くことばの中に混用されているもの」というレジスターに当たると考えていることである。「不知」は「不知道」に比べて硬い表現であると分析している。

一方で、「不知道」という形式について、(32)と同様の意味を表すことを文法化の観点から考察しているものに、森(2005)と丁(2012)がある。いずれも「不知」という言い方には言及がないが、記述にある「不知道」と(32)の「不知」は機能として同じとみてよいだろう。丁(2012:32)は「不知道」の機能を「疑いの気持ちを表す」とし、類似の機能を持つ文末助詞の「呢」との用法を対比している。しかし、提示する例文において「不知道」を文末に置く例は見えず、普通話の例として当該要素が文末を占めることは少なくとも観察されていないものと判断する。

「不知」をめぐる迪慶漢語と普通話の相違点は、以上のように際立つものである。一方で迪慶漢語「不知」はカムチベット語の *myi shes* の文末標識としての用法と共通点を持つように見える。以下に迪慶漢語「不知」、カムチベット語 *myi shes*、そして日本語「知らんけど」を表形式にして対照してみたい。当てはまる項目にはY、そうでない場合はNと記す。また、参考となる例文番号および必要な解説を付す。

表4 「知らんけど」をめぐる諸特徴の対照

特徴	迪慶漢語 「不知」	カムチベット語 myi shes	日本語 「知らんけど」
当該語句が文末に出現する	Y (18)	Y (7b, 8, 9)	Y (1)
文末に来る当該語句の直前にポーズがある	N (18)	N (9a)	Y (1)
当該語句が文中に出現する	Y (20)	N	N (4)
当該語句は文末標識と分析できる	Y (26-30)	Y (15)	Y (1-6)
当該語句を韻律特徴を変えずに「たぶん」などの副詞と置換可能	N (31a)	Y (13)	Y (3)
当該語句を構成する形態素を変更可能	N (25)	N (14, 16)	N (5)
当該語句が証拠性の体系に組み込まれている	N* 証拠性は体系化されない	Y/N (7b, 17) *変種による	N*証拠性は体系化されない
当該語句に文末標識が先行しうる	Y (28a)	N (12b)	Y (3d)
当該語句に文末標識が続さうる	N (26b)	N (15) *証拠性の体系の一部を構成する場合はY (17)	N (5)

まず、形態論的に見ると、「不知」、myi shes、「知らんけど」のいずれも、それを構成する形態素の変更が不可能であるという点で、一種の語彙化を達成しているといえる。以上の3言語で、当該要素が文末に現れる点も共通している。そして、文末におけるまいから、当該要素が文末標識という性質を獲得しているものと分析できる。一方、迪慶漢語の場合は「不知」を文中（動詞の直前）に置いても受容され、その他の「可能」などの副詞と交替可能であるが、文末の「不知」は他の副詞とは交替できない。この特徴は、カムチベット語と日本語の現象と異なる。文末標識という特徴に着目すると、迪慶漢語とカムチベット語では、当該要素と先行する要素の間にポーズが置かれませんが、日本語ではポーズが入る。また、迪慶漢語と日本語の場合は先行する句の末尾に異なる文末標識が先行しうるが、カムチベット語では受容されない。逆に、カムチベット語はmyi shesが証拠性の体系の一部に組み込まれる変種とそうでない変種が共時的に認められる。他の2つの言語では証拠性が体系化されていないため、カムチベット語と同列に見ることはできないが、カムチベット語の変種の中で差異が生じていることを観察の結果として並列しておく。

さて、3言語におけるいずれの現象も、「知る」という意味の動詞と否定を表す形態素の組み合わせで成立している語句がまとまって語彙化し文末標識になるという点は、自立語から機能語へと変容する文法化（grammaticalisation）の過程を経たと言える。語彙的に特定の形態素のみに固定されているため、文法化の程度が高いと考えられる。文末標識としては、それ自体が独立した機能を持っているが、カムチベット語、特に建塘方言では、文末標識から文法化の度合いがさらに一歩進んで、推定の証拠性を示す形態の構成要素となっている。

意味的な点を考えると、いずれも先行する発話に対する確かさについて推測を含むことを表す点で共通する。このため、「たぶん」や「おそらく」といった意味の副詞と酷似した機能があり、置換も可能であるが、迪慶漢語の場合、副詞の場合はその直前にポーズが必要となり、この点で「不知」は副詞とは異なる特徴を示す。カムチベット語の場合、「可能」という副詞とは韻律特徴を変えずに置換可能であることを確認し、日本語の場合は意味的に同類の副詞とおおむね置換可能であるという点で、文末標識と副詞の関係について各言語間で異なりが見られる。

以上の状況から見て、「動詞＋否定辞」が文法化し「文末標識」となったのは、3言語に共通して認められる現象である。それがさらに深化し文法化して証拠性の体系の一部にまで入り込んだ言語（建塘方言）もある一方で、確かさの度合いを表す副詞の機能を獲得し、機能語から自立語への脱文法化（degrammaticalisation）を経て、他の副詞と似たようなふるまいを獲得しつつある言語（関西方言）もある。漢語について考えると、そもそも「不知」という形式で動詞の本義とは若干異なる意味を持つ表現、たとえば(32)が存在しており、このことが他の言語には見られない文中での使用が受容されている要因と見られる。

一方で、語順の性質を考えれば、むしろ迪慶漢語が文末に「不知」を受容したことが有標であると考えられる。これがカムチベット語をはじめとする非漢語との接触によって発生したと考えることは、伝聞を表す「说」といった並行例(23)もあるため、非常に蓋然性の高いものである。ただし、迪慶漢語の場合、カムチベット語と同じく動詞を文末に置くという構造を完全に受容しているとはいいがたく、「不知」は文末に出現するとしても、語彙動詞が文末に移動する例は限られている。(33b)のように存在を表す「有」は文末に出現するが、判断を表す「是」（繫辞）は出現しない。この点で、迪慶漢語は動詞が原則として文末に現れる雅江倒話（意西微薩・阿錯 2004）などと異なる構造をもつといえる。

- (33) a. 有六个不知。(=22)
 「6人いる、知らんけど」
 b. 六个有不知。
 「6人いる、知らんけど」
 c. 他是老师不知。(=18a)
 「彼は先生だ、知らんけど」
 d. *他老师是不知。

ただし、(33b)の「有不知」という形式は(20)のような表現と異なり、「*不知有」という語順が認められない。(33b)のような迪慶漢語特有の語順による事例では、(20)や普通話で認められる「不知＋動詞」という語順が受容されない。このことから、「不知」は文末標識としてすでに成立していて、逆に(20)のような例は普通話に見られる構造（副詞＋動詞）を反映したうえでの発話形式であると考えられる。

本来は否定副詞＋動詞という構成をとる「不知」が文末標識としての用法を獲得したことを言語接触によると判断するためには、言語接触の過程に関する精緻な検討が必要である。迪慶州における漢語とカムチベット語の関係については、反語用法の疑問副詞が否定辞として文法化する過程について Suzuki & Lozong Lhamo (2021) や鈴木 (2022) が言語接触の可能性を検討している。しかしながら、議論はなお不十分であり、漢語の事例が先かカムチベット語の事例が先か、それとも相互に対応する形態素を用いた文法化が言語を超えて同時多発的に成立したのか、結論は出ていない。さらに検証可能な例を収集し、詳細な研究を進める必要がある。

4. まとめと課題

本稿では、日本語関西方言の「知らんけど」を参照点に、雲南省西北部に位置する迪慶チベット族自治州香格里拉市で話されるカムチベット語及び漢語西南官話で用いられる、動詞「知る」に相当する語を用いて動詞の本義とは異なる用法となる例について記

述した。両者に見られる形式「myi shes」と「不知」は、偶然にも「知らんけど」に非常に近い形式と意味合いを持つ。これらの要素は、証拠性の体系の一部を占めるカムチベット語では推測の証拠性を表す形式の1つとして考えられるが、「myi shes」という形態自体を証拠性の体系に組み込んでいるか、付加的な表現と考えるかで方言差が現れる。一方、漢語や日本語では、表現が固定化され文末に出現しかつ推測を表す語彙化した標識であるといえ、その用法が定着しているかどうかで差異が出るのが分かった。

以上の発展は文法化という枠組みで理解できる。いずれの言語にも共通して見えるのは、動詞が語彙的動詞としての機能を失い、特定の語形式で文末標識を形成するという過程である。この中で、カムチベット語はさらに文法化が一步進んで証拠性を表す接辞を構成する一部分となることで自立性を失うという過程を経た変種がある。一方で、3言語ともに、文末標識としての意味がより副詞的になり、他の確かさの度合いを表す語彙的副詞と交換できるようになりつつあるのもうかがえる。これは文末標識から副詞への脱文法化現象であるように見えるが、逆に文法化と呼んだ現象が完成していない状況で、動詞句から副詞へと語類が転用した可能性もある。これについては、さらに研究を深めていかなければならない。

本稿では、データ収集の面で不十分な点がある。各言語で最も適切な調査計画を策定し、調査対象をより限定的にして定量的な検証を行うなど、より詳細な研究が俟たれる。

〈参照文献〉

- 伊地智善継（編）2002. 『白水社中国語辞典』、東京：白水社。
- 倉石武四郎 1990. 『岩波中国語辞典 簡体字版』、東京：岩波書店。
- 鈴木博之 2018. 「香格里拉市北部のカムチベット語諸方言の方言特徴とその形成」『アジア・アフリカ言語文化研究』95: 5–63 頁。doi: <https://doi.org/10.15026/92458>
- 鈴木博之、四郎翁姆 2018. 「カムチベット語塔公[Lhagang]方言の述部に標示される証拠性」、『言語記述論集』10: 13–42 頁。URI: <http://id.nii.ac.jp/1422/00002000/>
- 丁寧 2012. 「日本語の疑い表現「やら」の意味と用法—中国語の疑い表現との対照を兼ねて—」、『一橋日本語教育研究』1: 25–36 頁。URI: <https://hdl.handle.net/10086/25451>
- 星泉 2016. 『古典チベット語文法：『王統明鏡史』（14世紀）に基づいて』、府中：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。URI: <https://hdl.handle.net/10108/94480>
- 森宏子 2005. 「“不知道”の文法化現象について」、『中国学志』20: 31–48 頁。
- 熊進 2007. 「成都方言の文法研究—文法化のアプローチ」、早稲田大学博士論文。URI: <http://hdl.handle.net/2065/28520>
- 鈴木博之 2022. 《从“哪”到“不”：云南迪庆藏语否定标记的语法化》，林範彦・池田巧（編）『シナ＝チベット系諸言語の文法現象5：否定の多様性』、京都大学人文科学研究所，73–83 頁。URI: <http://hdl.handle.net/2433/275707>
- 陆绍尊 1990. 《藏语中甸话的语音特征》，《语言研究》第2期：147–159 页。
- 吴成虎 2007. 《维西汉语方言词典》。上海：上海辞书出版社。
- 意西微萨・阿错 2004. 《倒话研究》。北京：民族出版社。
- 《云南省志》编纂委员会 1989. 《云南省志 卷五十八 汉语方言志》。昆明：云南人民出版社。
- 《云南省志》编纂委员会 1998. 《云南省志 卷五十九 少数民族语言文字志》。昆明：云南人民出版社。
- 云南省中甸县地方志编纂委员会 1997. 《中甸县志》。昆明：云南民族出版社。

- Aikhenvald, Alexandra Y. 2018. Evidentiality: The framework. In Alexandra Y. Aikhenvald (ed) *The Oxford handbook of evidentiality*. Oxford: Oxford University Press. Online, 52pp. doi: <https://doi.org/10.1093/oxfordhb/9780198759515.013.1>
- Gawne, Lauren. 2016. *A sketch grammar of Lamjung Yolmo*. Canberra: Pacific Linguistics, The Australian National University. URI: <http://hdl.handle.net/1885/110258>
- Hongladarom, Krisadawan. 2007. Evidentiality in Rgyalthang Tibetan. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 30(2): 17–44. doi: <http://doi.org/10.15144/LTBA-30.2.17>
- Mélaç, Éric. 2014. L'évidentialité en anglais - approche contrastive à partir d'un corpus anglais-tibétain. Paris: Université de la Sorbonne nouvelle - Paris 3 PhD dissertation. URI: <https://tel.archives-ouvertes.fr/tel-01230545>
- de Nebesky-Wojkowitz, René. 1956. *Oracles and demons of Tibet: The cult and iconography of the Tibetan protective deities*. 's-Gravenhage: Mouton.
- Oisel, Guillaume. 2017. Re-evaluation of the evidential system of Lhasa Tibetan and its atypical functions. *Himalayan Linguistics* 16(2): 90–128. doi: <https://doi.org/10.5070/H916229119>
- Suzuki, Hiroyuki. 2022. *Geolinguistics in the eastern Tibetosphere: An introduction*. Tokyo: Geolinguistic Society of Japan. doi: <https://doi.org/10.5281/zenodo.5989176>
- Suzuki, Hiroyuki & Lozong Lhamo. 2021. /ka-/ negative prefix in Choswateng Tibetan (Shangri-La, Yunnan). *Language and Linguistics* 22(4): 593–629. doi: <https://doi.org/10.1075/lali.00092.suz>
- Suzuki, Hiroyuki, Sonam Wangmo & Tsering Samdrup. 2021. A contrastive approach to the evidential system in Tibetic languages: Examining five varieties from Khams and Amdo. *Gengo Kenkyu* 159: 69–101. doi: https://doi.org/10.11435/gengo.159.0_69
- Tournadre, Nicolas. 1996. *L'ergativité en tibétain moderne. Approche morphosyntaxique de la langue parlée*. Louvain: Peeters.
- Tournadre, Nicolas. 2014. The Tibetic languages and their classification. In Thomas Owen-Smith & Nathan W. Hill (eds.) *Trans-Himalayan linguistics: Historical and descriptive linguistics of the Himalayan area*. Berlin: Walter de Gruyter. 105–129. doi: <https://doi.org/10.1515/9783110310832>
- Tournadre, Nicolas & Randy J. LaPolla. 2014. Towards a new approach to evidentiality: Issues and directions for research. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 37(2): 240–263. doi: <https://doi.org/10.1075/ltba.37.2.04tou>
- Tournadre, Nicolas & Hiroyuki Suzuki. 2022. *The Tibetic languages: An introduction to the family of languages derived from Old Tibetan* (with the collaboration of Xavier Becker and Alain Brucelle for the cartography). Villejuif: LACITO Publications.
- Zeisler, Bettina. 2004. *Relative tense and aspectual values in Tibetan languages: A comparative study*. Berlin: Mouton de Gruyter. doi: <https://doi.org/10.1515/9783110908183>
- Zeisler, Bettina. 2018. Don't believe in a paradigm that you haven't manipulated yourself!—Evidentiality, speaker attitude, and admirativity in Ladakhi (extended version). *Himalayan Linguistics* 17(1): 67–130. doi: <https://doi.org/10.5070/H917136797>
- Zemp, Marius. 2018. *A grammar of Purik Tibetan*. Leiden: Brill. doi: <https://doi.org/10.1163/9789004366312>
- Zeng, Xiaoyu. 2018. A case study of dialect contact of early Mandarin. *Lingua* 208: 31–43. doi: <https://doi.org/10.1016/j.lingua.2018.03.004>

Zhou, Yang & Hiroyuki Suzuki. 2022. Evidentiality in Selibu: A contact-induced emergence. *Diachronica* 39(2): 268–309. doi: <https://doi.org/10.1075/dia.19055.zho> ; With an online appendix, 42pp.: <https://doi.org/10.1075/dia.19055.zho.additional>

(『雲漢』1号, 2023年3月26日)